

博士學位論文審査要旨

2017年2月1日

論文題目：境界の歴史を語るということープラナカン・メスティーン・琉球華僑ー

学位申請者：安里 陽子

審査委員：

主査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	富山 一郎
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	加藤 千洋
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	小山田 英治
副査：	京都大学 人文科学研究所	教授	田中 雅一

要 旨：

安里陽子氏提出の学位請求論文は、シンガポールの中国系住民であるプラナカン、フィリピンの中国系住民であるメスティン、沖縄における琉球華僑を、外来系住民としてとりあげ、その歴史と文化表象を実証的に検討することにより、国民というナショナルな主体でもなければグローバルな共同体でもない主体にかかわる歴史記述の可能性について、考察するものである。安里氏に取り上げるこうした外来系住民はこれまで、領土的に定義されたそれぞれの国家や地域におけるマイノリティー研究、エスニック研究、あるいは移動に注目した移民研究やディアスポラ研究などにおいてとりあげられてきた。しかしこうした研究枠組みでは、国民的な主体や民族的な同質性を前提として立てたうえで、外来系住民を周縁的存在として規定しているといえる。これに対して安里氏は、この前提自体を問うなかで、こうした人々が抱え込む、内に属しているが外にも開かれているという両義的な境界性に注目し、そこから歴史を描き直そうとするのである。こうした安里氏の試みは、ジェイムズ・クリフォードが展開した「移動から場所を見る」という視点や、メアリー・ルイズ・プラットが民族誌研究において導入した「コンタクトゾーン」という枠組みを、批判的に受け継いでいると同時に、国境を内部と外部の区分線ではなく、内部の手前にとどめておく「留置」と、いつでも強制的に捨て去ることができるという「廃棄性」という力学構造をもつ「境界ゾーン」としてとらえようとする近年の、サンドラ・メツァードらが展開する議論にも、深くかかわっている。以下、各章で展開された内容の説明を行い、同学位請求論文への総合的な評価を記す。

序章においては、本論文の方法論的検討が行われている。その際、上記のような理論的枠組みに加えて主題的に検討されているのは、「チャイニーズ性」という概念である。グローバルに広がる華人世界にかかわる研究が近年進んでいるが、安里氏はキャロライン・ハウらの華人研究に注目し、歴史を自称する中で決して同質的な主体に帰着しない異種混交性が遂行的に生み出されるという点に、「チャイニーズ性」の基軸を設定している。すなわちチャイニーズであるということは、内にとどまりながら外に開かれ続けるというプロセスを共有しているということに要点があり、決して区分された同質の民族集団を示すものではないのである。かかる方法論的検討を前提に、本論では中国系として分類されてきた外来系住民について、具体的に検討している。本論の第一章と第二章では、シンガポールのプラナカンが取り上げられている。そこでは、多くの移住者を受け入れるシンガポールにおいて、プラナカンの存在が国民統合の表象として登場してきている近年の状況を丁寧に分析しながら、プラナカン自身が自称する歴史を、博物館における表象などの分析から明らかにし、そこに国民統合に帰着しない歴史記述の可能性を見出してい

る。第三章ではフィリピンにおける中国系住民を取り上げ、海外に展開するフィリピン人の存在とともに検討している。すなわちシンガポールと異なりフィリピンは圧倒的に人々を送り出す地域であり、こうした広がりの中でフィリピン内に居住する中国系住民が国民統合に果たす意義を明らかにするとともに、やはりこうした国民統合とは異なる歴史をそこに見出しているのである。さらにこうした国家の内にながら外に開かれている存在が持つ歴史の可能性については、第四章において集中的に検討されている。すなわちパイン産業の展開の中で石垣島という場所に刻まれた琉球華僑の歴史を丁寧に追うことにより、それがグローバルに広がる華僑の歴史でもなければ、日本の歴史あるいは沖縄の歴史でもない領域を生み出していることを、聞き取りを含め具体的に明らかにしているのである。

こうした安里氏の研究は、「国民国家の固有の歴史」対「グローバルな歴史」という図式を批判的に問うものであり、今日のグローバリズムの展開が、単に国境を越える越境性ということではなく、固有な場における複数の歴史が、異なりながらも共存する可能性としてあるということを示すものだといえるだろう。推論がやや先走り、新しい歴史記述の全体像を提示するには至っていないが、最初にのべたマイノリティー研究やエスニック研究はもとより、これまでの帝国史研究、植民地主義史研究、華人研究にたいしても大きなインパクトを与える研究であることは間違いない。よって本審査委員会は、安里陽子提出の学位請求論文を、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位を授与するのにふさわしいものであると認める。

総合試験結果の要旨

2017年2月1日

論文題目：境界の歴史を語るということープラナカン・メスティーソ・琉球華僑ー

学位申請者：安里 陽子

審査委員：

主査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	富山 一郎
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	加藤 千洋
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	小山田 英治
副査：	京都大学 人文科学研究所	教授	田中 雅一

要 旨：

学位申請者・安里陽子に対する総合試験を2017年1月10日13時から同14時30分まで、同志社大学志高館SK106にて実施した。前半の40分は申請者のプレゼンテーション、後半50分を質疑応答にあてた。

学位申請者は、本論文の問題意識、課題と方法、具体的な分析内容を、各章ごとに丁寧に説明し、審査委員からの質問に対しても的確かつ誠実に答え、本研究の学術的意義と今後の発展可能性について説得的に述べた。

本論文の主要部分は、査読付きの学術雑誌で発表されており、また関連して多くの国内外での学術報告が存在する。こうした研究業績との関連についても、質問がされ、明快な応答があった。また研究遂行上必要とされる英語能力も、十分であることが確認された。

よって、審査委員一同は、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 境界の歴史を語るということ
—プラナカン・メスティーソ・琉球華僑—
氏名： 安里 陽子

要旨：

本稿の課題は、国家的な権力、市場の力、当事者的な団体の力の絡まり合いとそれによって展開される広がりの中で、ある集合的な主体性が構築されるプロセスを明らかにするものであった。具体的にはシンガポールにおけるプラナカン、フィリピンにおける華人系メスティーソ、沖縄・八重山における琉球華僑を事例として取り上げ、それぞれが抱える状況のなかで検討した。集合的な主体性を形成する要素としては、植民地期・国民国家形成期・冷戦期における外来系住民への統合圧力、それに対する当事者的な団体の反応、さらには消費文化や観光、貿易といった経済活動が挙げられる。

チャイニーズ性について、これまで華人研究や移民研究、地域研究などにおいては所与のものとして扱われる傾向も見られたが、近年の研究では均質的な中国性、華人性ということに対する問いがたてられている。本稿では、近年の研究動向をふまえながら、チャイニーズ性を均質的なエスニシティで定義づけがなされるような静的なものとしてではなく、人びとが置かれている状況に応じてつねに再定義されるような、動態であり、遂行的なものであることを検討した。以下、本稿の内容を各章の課題とともに振り返っておく。

第1章では、プラナカンはチャイニーズとしてひとくくりされることにより、海峡植民地政府による追放令、日本軍による粛清や献金といった暴力にさらされる危険にさらされてきたのであり、暴力を避けるためにたとえば英国臣民という集合的主体をつくりあげてきた。シンガポールにおいてプラナカンは人口管理政策として用いられる CMIO 分類で明確な位置づけがなされていない。それは近年急増する新移民を、シンガポリアンはみなプラナカンであるという言説に載せ、新移民を社会統合するコードとしてプラナカン概念が用いられていることを明らかにした。

第2章では、プラナカンの組織であるシンガポール・プラナカン協会の活動に焦点をあて、国家に取り込まれながらも文化を打ち出していくことで価値を高め、プラナカン概念を主体的に再定義していくプロセスを分析した。シンガポールの独立後、政治的な権力と影響力を失ったプラナカンは、文化を打ち出すというミッションのもと、マラッカやペナンのプラナカン協会との連携も再び活発化した。協会による、プラナカン文化を発信するという活動はやがて 1990 年代に入ると政府主導によるエスニック・センター建設活動と結びついていく。建国 50 年を迎えた 2015 年、プラナカンは「偉大なるプラナカン」という語りを打ち出す。それまで脱政治化され、文化や商品としてのみ流通していたプラナカン概念を、ここで思い切り方向転換し、自ら再定義したのである。「政治的に死んだ」プラナカンからの脱却は、再びプラナカンの政治を抱え込むことの宣言とも受け取ることができる。

第3章では、フィリピンにおける華人系メスティーソがどのように集合的な主体性を形成してきたのかについて、まず華人系メスティーソがスペイン植民地期から近年にいたるまでどのように定義されてきたのかを歴史的に考察した。スペイン植民地期には、チャイニーズはキリスト教へ改宗した者は課税額が減額され、課税能力によってインディオとなることもできたように、エスニシティを本質的なものとして分類するのではなくむしろ逆に宗教や課税能力によって分類がなされていたのであった。やがてメスティーソという語はスペイン系およびアメリカ系をおもに指す語となり、チャイニーズ性は消去され、チャイニーズは他者化された。

しかし 1975 年の中国との国交正常化は、フィリピンのチャイニーズにとって大きな転換点となった。フィリピン国籍の取得が可能となり、多くのチャイニーズがフィリピン人となったが、当時のフィリピンは経済状況が悪化していたことから華人系の人びとは新たな問題に直面するようになる。

そうした状況下菲律濱華裔青年聯合會は、チャイニーズはフィリピン人より裕福でフィリピン経済を牛耳る存在とみなされていることによる不当な排除と暴力から華人系コミュニティを守る運動を進めていくため、1987年に設立された。「チノイ」という語を提唱し、フィリピン社会においてエスニック・マイノリティとしての権利を主張すると同時に、海外との華人ネットワーク構築も活発におこなう活動を展開したのである。

いっぽう、OFWs となって国外へ出ていくピノイと、その受け入れ国が台湾や香港のようにチャイニーズ性を有する場合、ピノイの経験がつねに鏡像のようになってチノイにチャイニーズ性を意識させる現象がみられた。また、フィリピン国内では古くから裕福な存在とみなされてきたチノイは、中産階級化し始めた OFWs と、いわば国内においても鏡像のような関係になってきたのである。国民統合の問題として扱われてきたチャイニーズと、その鏡像のような OFWs が同居するフィリピン国内、さらには国外に散在するフィリピン国籍の人びとが国民の 1 割を超える状況においては、チャイニーズ性と同様にフィリピン性も遂行的に変化していくものとしてとらえる必要があることを明らかにした。

第 4 章では、沖縄・八重山における琉球華僑について、ともに語られるパイン産業の労働力に着目することにより、沖縄本島における琉球華僑とは異なる集合的主体を形成していくプロセスを分析した。まず 1930 年代に日本の植民地であった台湾から、八重山へ移住する人びとがおり、パイン産業を導入しパイン缶詰を日本本土へ輸出するまでになる経緯について述べた。特筆すべきは、台湾からの移住者が有する農業技術の高さであった。当時の八重山では、土地の耕作は鋤でおこなう手作業だったのと比べ、台湾農業者は水牛を使いパワフルにおこなっており、地元民には驚きを持って受け止められた。しかし土地が奪われるのではないかと感じたことから、攻撃の対象が水牛へと転化する事態も生じた。

戦後、日本が植民地台湾を失ったことによって、台湾に代わる供給地として八重山でのパイン産業が再興される。米軍占領下沖縄は、1950 年代後半に通貨切替によって米ドル経済圏となり、パイン産業にも日本本土商社などから多額の投資が集まることとなり、さらには特惠措置もなされたことからパイン栽培が加熱し、八重山には「パインブーム」が起こる。

その結果工場での労働力不足に陥ることになり、台湾と沖縄の経済界が中心となって設立した民間団体、中琉文化経済協会により、台湾から季節労働者が派遣されることとなった。この派遣事業で導入された労働者は、冷戦下の当時、東南アジアにいた華人を共産中国ではなく台湾が受け入れた人びとも混ざっており、いわば「台湾人」とされ沖縄へ派遣された労働者でもあった。

台湾系の人びとで構成される団体である琉球華僑総会は、八重山分会と那覇の本部がある。しかし、台湾系というエスニックな意識を共有する、つながりの強い団体ということではない。八重山分会のほうはもともと戦前期に林発氏らが結成した「台友会」につながる 80 年あまりの歴史を持つが、那覇の本部は沖縄が日本復帰するのを機に結成された。結成前から、「世界の華僑」をアピールしたい本部と、あくまでも地元社会とのつながりを大事に「入植者の集い」であることを強調する分会では、総会へ参加する目的意識も異なっていたのである。「世界の華僑」と自分たちは違う、自分たちは入植者であくまでも農民であって、「台湾の八重山人」なんだ、という分会メンバーの語りは、顕顕碑を建設しようと計画をたてた八重山出身の人びとの思いと共通しており、それは碑文での「台湾農業者」という呼称にも、あらわれているといえることができる。

本稿においてプラナカン、華人系メスティーソ、琉球華僑の 3 者を取り上げたのは、比較の土台を問い直すことの試みのひとつでもある。3 者は、シンガポールとフィリピン、沖縄・八重山、という国民国家や地域の内と外、と単純に分類することが難しい人びとでもある。しかし、だか

らといってトランスナショナルな華人やコスモポリタン、あるいは不法滞在者というように、国家という枠組みでの分類を前提としてそこからはみ出している者、というわけでもない。いずれも外来系住民として、外来性を帯びつつある場所で生きることを選択し続けているといえるような人びとである。こうした外来系住民は、これまでは国民国家という枠組みのなかでマジョリティとの対比によって国家のなかのマイノリティとして位置づけられてきた。国民国家の歴史を語ることでできる当事者とみなされることはなく、マイノリティから見た国家の歴史、というように、いつでも国民国家のなかに置かれ、そこでは主体的に歴史や文化を語っていくことはなされていなかったといえよう。

こうした従来の歴史や文化の語りは、国民国家という枠組みにおいて、国民か国民ではないか、マジョリティかマイノリティか、と位置づけがなされてきた。それは換言すると、国家においては内か外か、というすぐさま分類が可能となる土台で、マジョリティが主体となって比較対象が決定される土台において、比較がなされたことによる。

本稿では、プラナカン、華人系メスティーソ、琉球華僑という、国民国家も共通しない3者、さらにそれぞれの「ルーツ」とみなされる場所自体も国民国家とみなされてはいない人びとを取り上げた。本論ではそれぞれの場所において、いかにしてプラナカンが、華人系メスティーソ、琉球華僑（八重山で）が主体的に自らを語るため集合的主体を形成するプロセスを分析した。そのうえで明らかになったことは、比較がなされる対象が変わるたびにそれぞれのあらわれは変化していることであった。それはまさに、チャイニーズ性とは遂行的なものであるということと接続しているのである。